礼拝説教（2023 年３月 26 日）

説教者：中村信哉

ただ安らかに

詩篇４篇 1-8 節

はじめに

今年から第四週の説教は、旧約聖書の「詩篇」からお話することにしています。今日は、詩篇４篇から学びたいと思いますが、詩篇４篇は「夕べの祈り」と呼ばれています。８節に**「平安のうちに私は身を横たえ、すぐ眠りにつきます。主よ、ただあなただけが、安らかに、私を住まわせてくださいます」**とあります。夜寝る前に、この詩篇を読んで眠りにつく、そういう詩なのかもしれません。

睡眠というのは、私たちにとってとても大切なものです。睡眠時間が足りなくなると、体調を崩したり、心も不安定になります。若い頃は、いくらでも眠ることができました。いつでもどこでも眠れたような気がします。しかし大人になると、段々と眠ることが難しくなりました。なかなか寝付けなかったり、夜中に目が覚めたり、朝早く目が覚めてしまったり。年のせいもあると思いますが、心配事が増えてきたということもあると思います。体は疲れているけれど、頭の中には考え事が残っていて、頭が動いている、だから寝付けなかったり、目が覚めたりしてしまいます。

８節にあるように、心に平安がある時や心が安らかな時には、よく眠れます。では、私たちの心の平安は、どうしたら得ることができるのでしょうか？どうしたら安らかに眠ることができるのでしょうか？

1. 祈りを聞いてください

１節を見てみましょう。**「私が呼ぶとき、答えてください。私の義なる神。追いつめられたとき、あなたは私を解き放ってくださいました。私をあわれみ、私の祈りを聞いてください」**。ここでダビデは、「私が呼ぶとき、答えてください」「私をあわれみ、私の祈りを聞いてください」と祈り始めています。詩篇４篇は、神様に祈ることから始まり、最終的に心に平安が与えられ、安らかに眠るという形で終わっていきます。その意味で、まず第一に言えることは、私たちは神様に祈ることで、心に平安が与えられ、安らかな眠りへと導かれていくということではないかと思います。

ダビデは、祈り始める時、神様を「私の義なる神」と呼びかけます。これは、神様は正しい方という意味かもしれませんし、私に義を与えてくださる方、私を正しいと認めてくださる方という意味かもしれません。いずれにしても、祈り始める時に、神様をどう呼ぶかということは、とても大切なことだと思います。最初に神様をどう呼ぶかで、後に続く祈りの内容が変わってくると思うのです。私たちが毎週の礼拝で祈る「主の祈り」は、「天にまして

すわれらの父よ」と呼びかけることから始まります。これは、イエス様が教えた祈りです。神様を自分の「お父さん」と思いながら祈るのが、「主の祈り」です。しかも単なる「お父さん」ではなく、「天」におられる全知全能の「お父さん」と思いながら祈るのが、「主の祈り」です。

私たちは祈り始める時に、神様を何と呼んでいるでしょうか。ただ「神様」と呼んでいるでしょうか。それとも「愛と恵みに満ちた神様」と呼ぶでしょうか。また「義なる神様」と呼ぶでしょうか。どんな呼び方でも良いし、その時々に応じて呼び方を変えても良いと思います。神様を何と呼んで祈り始めるかによって、その後に続く祈りは豊かになっていくと思います。神様を何と呼んで祈り始めるかということは、私たちはこれからどういう方に祈っていくのかを強く意識するになります。祈り始めの言葉を少し工夫することで、私たちの祈りはもっと豊かになっていくのではないでしょうか。

もう一つ１節で注目してみたいことは、「追いつめられたとき、あなたは私を解き放ってくださいました」とあることです。ダビデは、祈り始める時に、過去に神様が自分を助けてくれた経験を思い出しているのです。私たちは祈る時に、神様がこれまで自分にしてくださったことを思い出すことが大切です。そのことによって、私たちの祈りの確信は強められます。これまで神様は良くしてくださったのだから、きっとこれからも私に良くしてくださる、きっとこれからささげる祈りも聞いてくださる、そう思えるのです。

私たちの心に平安が与えられるためには、祈ることが大切だと思います。そして祈り始める時に、①神様を何と呼ぶかを意識すること、②神様がこれまで自分にしてくださったことを思い出すこと、が大切だと思います。

2. <u>主は聖徒を特別に扱われる</u>

次に 2-5 節を見てみましょう。**「人の子たちよ、いつまで私の栄光を辱め、空しいものを愛し、偽りを慕い求めるのか。知れ。主はご自分の聖徒を特別に扱われるのだ。私が呼ぶとき、主は聞いてくださる。震えわななけ。罪を犯すな。心の中で語り、床の上で静まれ。義のいけにえを献げ、主に拠り頼め」**。2-5 節は、「人の子たち」に対する言葉が書かれています。ダビデは、最初は神様に祈り始めましたけれど、途中で「人の子たち」に語りかけます。そして、６節からはまた神様への祈りに戻って来て、この詩を閉じていきます。

「人の子たち」というのは、「社会的地位の高い人たち」「経済的に豊かな人たち」を意味します。では、そのような社会的地位が高く、経済的に豊かな人たちを、ダビデはどのように見ているのでしょうか。ダビデは、そのような人たちを、「私の栄光を辱め、空しいものを愛し、偽りを慕い求めている」人たちと見ているのです。ダビデにとって「私の栄光」とは、「神様ご自身」を意味します。また「空しいもの」「偽り」は偶像を意味することがあります。ダビデにとって、社会的地位が高く、経済的に豊かな人たちは、偶像を愛し、神様を辱めているように見えたのです。新約聖書において使徒パウロは、貪り、貪欲は偶像礼拝だと言います。たとえ無宗教でも、自分は何の神様も信じていない、そもそも神様なんていな

いという人も、実は偶像を礼拝しているとパウロは言うのです。その偶像の名前は、「貪り」であり、「貪欲」です。地位や名誉を貪り、お金や社会的な成功を貪欲に求めていくことは、偶像礼拝だとパウロは言うのです。そしてそのような偶像を礼拝することは、空しいことであり、偽りを慕い求めることであり、神様を辱めることになるとダビデは言うのです。

そしてダビデは、そのような人たちに向かってこう言うのです。「知れ。主はご自分の聖徒を特別に扱われるのだ。私が呼ぶとき、主は聞いてくださる。震えわななけ。罪を犯すな。心の中で語り、床の上で静まれ。義のいけにえを献げ、主に拠り頼め」。ダビデは、偶像を愛し、慕い求める人たちを批判して、切り捨ててしまうのではありません。彼は、そのような人たちを、神様の恵みの中へと招いているのです。神様との特別な関係の中へ。神様との特別な関係とは、「私が呼ぶとき、主は聞いてくださる」という関係です。つまり、天地を造られた、全知全能の神様が、私の祈りを聞いてくださる、私の声に耳を傾けてくださる、それが、神様との特別な関係です。

では、どうしたら神様との特別な関係を持つことができるのでしょうか。それは、第一に「震えわななけ。罪を犯すな」ということです。つまり、神様を恐れて、罪を犯さないということです。第二に、「心の中で語り、床の上で静まれ」ということです。心を静めて、よく考えることです。自分の生き方をよく振り返り、何が本当の意味で自分を幸せにするのかをよく考えることです。そして第三に、「義のいけにえを献げ、主に拠り頼め」ということです。「義のいけにえを献げる」ということは、「悔い改める」ということです。悔い改めて、自分の生き方を明確に方向転換することです。空しいものを愛し、偽りを慕い求めて生きることから、神様を愛し、神様により頼んで生きることへと明確に方向転換することです。

私たち人間には、根本的に二つの生き方があります。聖書が「主」と呼ぶ、天地を造られた唯一の真の神様に拠り頼んで生きるか、それとも偶像に拠り頼んで生きるか。ダビデは、偶像は空しい、偽りだと言います。そして唯一の真の神様こそ、私たちの声に耳を傾け、私たちの祈りに答え、私たちを本当の意味で助けることができる方だと言うのです。

3. <u>私の心に喜びを下さいます</u>

6-8 節を見てみましょう。**「多くの者は言っています。『だれがわれわれに、良い目を見させてくれるのか』と。主よ、どうか、あなたの御顔の光を、私たちの上に照らしてください。あなたは喜びを私の心に下さいます。それは、彼らに穀物と新しいぶどう酒が、豊かにある時にもまさっています。平安のうちに私は身を横たえ、すぐ眠りにつきます。主よ、あなただけが、安らかに、私を住まわせてくださいます」**。

多くの人は、「だれがわれわれに、良い目を見させてくれるのか」、つまり、誰が自分たちを幸せにしてくれるのかと求めています。誰もが幸せを求めて生きています。しかし多くの人は、空しいものを愛し、偽りを慕い求めていってしまうのです。そこでダビデは、「主よ、どうか、あなたの御顔の光を、私たちの上に照らしてください」と祈っています。

「御顔の光を照らしてください」というのは、「神様、こっちを向いてください」という

ことです。もっと言うなら、「神様、笑顔でこっちを向いてください」ということです。私たちの人間関係でも、誰かが自分のほうを見てくれない、そっぽを向いているという時は、関係が悪いことを意味します。笑顔で、顔と顔を合わせている時、その関係が良いことを意味します。「御顔の光を照らす」というのは、神様との関係が良いこと、神様との関係に平和があることを意味します。そのように神様との関係に平和がある時に、私たちに幸せがあるというのが、ダビデの確信です。だからこそ、幸せを求めている人たちのために、御顔の光が照らされることを祈っているのです。

ダビデが、この詩篇 4 篇で具体的に神様に願っていることは一つです。それは、「主よ、どうか、あなたの御顔の光を、私たちの上に照らしてください」ということです。つまり、多くの人が神様との関係に平和があるようにということです。なぜなら、神様との関係に平和がある時に、神様は私たちを特別に扱い、私たちの祈りを聞いてくださるからです。それだけではありません。「あなたは喜びを私の心にくださいます。それは、彼らに穀物と新しいぶどう酒が、豊かにある時にもまさっています。平安のうちに私は身を横たえ、すぐ眠りにつきます。主よ、あなただけが、安らかに、私を住まわせてくださいます」とあるように、神様との関係に平和がある時に、私たちの心に喜びと平安が与えられるのです。その喜びとは、「穀物と新しいぶどう酒が、豊かにある時にもまさっている」ものです。つまり、どんなに物質的に豊かであっても、その喜びにまさるものはありません。どんな地位や名誉も、どんな大金も社会的成功も、その喜びにまさるものはないとダビデは言うのです。そして、神様との平和こそ、私たちの心に平安を与え、安らかな眠りを与えてくれると言うのです。「あなただけが」とあるように、神様が与えてくださる安らぎは、この世が決して与えることのできないものです。

<u>おわりに</u>

詩篇 4 篇は、私たちの本当の喜びや安らぎは、天地を造られた唯一の真の神様との平和にこそあると教えているように思います。その平和の中で、心を静めて神様に祈る時に、またそのような神様との特別な関係の中にある時に、祈りが聞かれているという確信を持つ時に、私たちの心にこの世が与えることのできない喜びと平安が与えられていくのではないでしょうか。

パウロはこう言いました。**「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。・・・何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を越えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」(ピリピ 4:4、6-7)**。私たちには、心配事が沢山あります。夜眠れないほどの不安を抱えることもあります。しかし神様に祈る時に、私たちの心に喜びと平安が与えられるとパウロは言うのです。パウロは、祈りが叶ったら、あるいは答えられたら喜びと平安が与えられるとは言っていません。私たちの祈りを神様に知っていただいたら、神様に聞いていただいたら、喜びと平安が与えられると言っているのです。

つまり、私たちの祈りを神様が聞いてくださっているという確信が、私たちの心に喜びと平安を与えてくれると言うのです。心配事や不安の中でも、神様が私たちの祈りを聞いてくださっているという確信が、私たちの心を守り、安らかに眠らせてくれるのです。

イエス様は、嵐が吹き荒れる舟の中で安らかに眠っておられました。しかし一緒にいた弟子たちは、パニックに陥っていました。なぜイエス様は嵐の中でも安らかに眠ることができたのでしょうか。それは、神様との平和を持っていたからではないでしょうか。イエス様は弟子たちに言われました。**「どうして怖がるのですか。まだ信仰がないのですか」（マルコ 4:40）**。

私たちも人生の中で、様々な嵐を経験するでしょう。その中でも、神様との平和を持っていて、神様が私たちの祈りを聞いてくださっているという確信が、私たちに喜びと平安を与えて、私たちの心を守り、私たちに安らかな眠りを与えてくださるのではないでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちはしばしば、空しいものを愛し、偽りを慕い求めます。それらの偶像は、私たちに決して本当の喜びと平安を与えてくれません。あなたとの平和こそ、私たちの心に本当の喜びと平安を与えてくれます。この世が与えるどんな豊かさも、それにまさるものはありません。人生の嵐の中でも、その喜びと平安は消え去ることはありません。人生の嵐の中で、その喜びと平安は、私たちに安らかな眠りを与え、私たちの心を守ってくれます。どうか私たちが、祈り深くありますように。あなたが私たちの祈りを聞いてくださっていることに、喜びと平安を見出すことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。